

顕微鏡の先に見えるもの

細胞病理学講座（旧第2病理）
新垣和也（20期生）

皆さんはじめまして、細胞病理学講座（旧第2病理）の新垣と申します。今回、私の所属しております病理学講座を紹介する機会を得ることができましたので、御報告いたします。

細胞病理学講座は就任5年目、第2代教授加藤誠也を中心とする比較的若い教室です。日常業務として、基礎研究、外科病理診断の他、学部学生に対する教育、剖検を主に行っております。基礎研究に関しては、教授の専門領域である動脈硬化のetiologyを解明すべく、動脈硬化発症モデルマウスにおける形態学的、血清学的評価、培養細胞に対する種々の負荷とその解析、免疫組織化学による蛋白発現の評価などを行っています。また、本年（平成22年）4月より着任された千葉准教授は、近年話題となっています、iPS細胞やES細胞の研究を長年行っているのみならず、免疫学的研究の造詣が深く、今後、これらの技術を用いた、より発展性のある研究を行っていく予定です。外科病理診断については、臨床の各部門より提出された細胞診、生検および手術材料を腫瘍病理学講座（旧第1病理）、当講座、病院病理部の三部門体制で診断を行っています。当講座を含め、病理診断を研鑽中の若い医師が多数在籍し、これまで以上に病理の熱気が高まっています。今後、診断の質、迅速な対応に寄与するものと考えています。教育で

は、M3の系統講義の他、M5、M6の外科および産婦人科実習の一部に病理実習が含まれており、実際の病理検査室での診断業務を見学するとともに、典型例の供覧を行っています。病理実習を通して、病態病理学的な考えや病理画像相関という考えを再認識し、無味乾燥になりがちな医学知識の習得を、知的好奇心に満ち、系統立ったものになるよう心がけております。剖検においては、近年の内科認定施設の条件緩和などにより、剖検体数は著明に減少し、附属病院では平均して年間20体を割り込むところまで来ています。剖検診断の質の維持、死因究明という観点からは危惧される場所でもあります。やや雑駁な話となっていますが、病理学講座は基礎講座でありながら、病理診断や剖検などの臨床業務を通じ、臨床と深い関わりを持っています。基礎研究を通じて得られた研究成果を、実際の臨床の現場へ応用できるよう今後も一丸となって励んでいきます。最後に、日常業務で病理材料提出、剖検依頼をされる先生方へ。診断精度向上のため、依頼書への必要十分な情報（臨床経過、検体採取部位、検体の簡単なスキーマなど）の記載をされますよう宜しくお願い致します。何か御不明な点やお気付きの点などありましたら、各講座あるいは病理部までどうかお気軽にご連絡下さい。